

は し が き

1995年のセンターは多忙であった。原爆50周年を迎えて長崎大学、医学部、長崎市、長崎県のしゅじゅの行事、事業が計画され、センター職員もそれらに参加して重要な役割を果たした。中でも重要であったのは、長年の懸案であったセンター展示室の改修と展示パネルの全面改定であった。幸いにも長崎大学および、医学部同窓会50周年事業の一環として予算措置を講じていただき和文英文同時表記のカラーパネルがセンター職員の総掛かりで完成した。内容的にも立派なものとなり、約20分程度の見学で長崎を中心とする「原爆の医学的影響」が直ちに理解できる構成となっている。多くの方からのおすすめもあって、長崎大学情報センター発信のインターネットのホームページに掲載していただき、世界各地からのアクセスが続いている。原爆情報の積極的発信の重要性を痛感した。さらにカラー版の小冊子にもなって大学職員、全国の大学図書館、文部省へ配付されたが、これも好評で追加の依頼があっている。この他「長崎大学医学部の写真でみる138年」の写真展をポンペイ館2階で開催した。ここにあらためて原爆の犠牲になられた方々の御冥福を祈るとともに、同窓会50周年事業委員会に深甚の意を捧げて感謝申し上げたい。

核兵器の戦時使用の幕が切って落とされて半世紀、核の使用は抑制されてきたが、今も核兵器は蓄積され人類の未来に暗雲をたれている。1995年もフランスのムルロワにおける核実験が続いた。世界で唯一の被爆医科大学で学ぶ医学部の学生教官有志の仏紙ルモンドへの意見広告はやむにやまれぬ心情からであった。資料センターの真の役割も、原爆の科学的真実を常に発信して「核廃絶」への世論形成に役立つことであると信ずる。21世紀を目前にして人類の英知によってその目的を達成する日が来ることを願わないではいられない。

原爆被災学術資料センター長 朝 長 万左男